

4月20日にオープンした新・観世能楽堂にすでに足を運ばれた方もいらっしゃると思いますが、私は4月24日「観世能楽堂開場記念 若手特別公演」に行って来ました。銀座駅から徒歩5分程、オツと声が出そうなガラス張りの煌びやかな店が目立つ、超モダンな大きなビルがGINZA SIX。そのビルの銀座本通り側でなく、反対の三原通りに面した入口から入り、地下3階に能楽堂があります。

能楽師さん自ら道案内されるほど力が入った記念公演で、能楽堂のロビーに着くと、百個(?)近い胡蝶蘭など有名人の豪華な花かごが並んでいました。例のごとくミーハーな私は、そこでの写真を撮るためお伺いをしたのが観世芳伸さん。良いですよと気さくなお許しなら、「お二人で一緒のところを撮ってあげますよ」と声を掛けて下さったのが家元夫人。私は即、それなら御夫人もお願いして、結局花の前に三人で写真を撮って頂きました。私にとってはビッグな(!)オープン記念になりました。

舞台は松涛の移築だそうです。客席数は480と少なめで、橋掛りの短い長方形型。多目的ホールとしての機能を考慮してかと思いますが、能楽堂としてのたたずまいには物足りなさを否めません。何といても土地代の高い銀座で経営して行く大変さが想像できます。見易さが肝心ですが、この日私は前4列目の正面席だったので、とても見易かった。その一因は席が半分ずつずらしてあり、前の人の頭が重ならないからです。折角正面の高価な席を買っても前の人の頭で見えないということはないそうです。

この日は若手公演のせいか、旧来の客と違って若い女性が圧倒的。能楽界の将来を考えると、やはり若い人達に馴染んで貰わないと困る事です。私の隣席はまさにそういう若い女性(といっても30代か)。袖触れ合うご縁でいろいろ話してみると、美容院で結った見事な髪型、美しい和服を着こなした彼女は、仕事はデパートの店員で着物を着るのが大好き、能は時々観るとのことでした。

この日は観世流の若手人気能楽師の勢揃いで能は「乱」と「石橋」でした。

**能「乱」** 小書置壺/双之舞 シテ猩々・坂口貴信・林宗一郎 ワキ・館田善博 地頭・武田友志

大鼓・原岡一之 小鼓・鶴沢洋太郎 笛・松田弘之 太鼓・小寺真佐人

舞台には大きな酒壺がおかれ、親孝行のワキ・高風が、夢のお告げで酒屋になったら、毎日のように来る客がいて大繁盛。その客の住処を訪ねるといって詞で始まります。謡本ではとても短い曲ながら、見せ場は何と言っても高風と客の猩々が江のほとりで再会し喜び、猩々の華やかで楽しく、独特の足遣いの舞に尽きます。今回は猩々二人の相舞で、その呼吸の良さ、動きのキレの良さなど申し分なく素晴らしく、我を忘れて見入ってしまいました。もう一つ私の印象に残ったのは、その緋色の装束の袖から見える手。ぞくぞくするような色気があって、若い能楽師ならではの魅力と思いました。

猩々の能面は室町時代の出目久永と江戸時代の河内作。さすがに絶品、表情が何とも良い。

**能「石橋」** 白獅子・上田公威 赤獅子・坂井音雅 赤獅子・武田宗典 赤獅子・関根祥丸 地頭・野村昌司

大鼓・柿原弘和 小鼓・幸正昭 笛・一噌隆之 太鼓・林雄一郎

舞台先に二つの一畳台が置かれ、その両横にちょっとオーバーじゃないかと思うような大きく真っ赤な花の付いた牡丹の木が飾られて、まず白獅子が現れます。この能のほとんどお決まりで、前半部分がカット。余りストーリーを知らないまま、結局のところ物語より白頭、赤頭が髪を大きく振りながら台の上を飛んだり跳ねたり。この日は4人が勇壮でダイナミックな舞をするので凄い。半端ではない身体能力で、若い能楽師の面目躍如ですし、私も手に汗握る程の興奮を覚えました。知識がなくても誰もが楽しめる曲を、開幕公演に選ばれたのでしょう。新・観世能楽堂になって、若い能楽師達がどんどん活躍されれば、若い客層も広がるのではと、一能楽ファンとして願います。

「石橋」の蛇足として、私の能楽同門の先輩が死線をさまよった時、三途の川に石橋があり、渡ろうとすると、孫が「おじいちゃん、死んじゃ厭だ」と叫んだ声に蘇生したという臨死体験を聞き感心しました。

能楽を嗜むなら、あの世へ行く時はやはり「石橋」を渡りたいものです。

尾崎 純子